

二〇二六年一月一〇日

漣の綺羅に紛れて鳩浮ぶ
馬の字の翔るがごとし吉書揚
幼子の不平不満に初笑

康子

かかし

もところ

二〇二六年一月九日

人混みに赤襟巻の夫を追ふ

あひる

二〇二六年一月八日

海山の幸もちよりて馳走初句会
神さぶる紵の森の淑気かな

千鶴

もところ

二〇二六年一月七日

みどり子の百面相に初笑ひ
古井戸の蓋に集合寒雀

きよえ

むべ

天守より見渡す城下淑気満つ

たか子

四囲の山模糊と迫りて春まぢか

明日香

擁緩むやに大岩の蔦枯るる

ぼんこ

百歳の祝い花来る七日かな

董雨

風癖のままに打ち伏す枯野かな

むべ

二〇二六年一月六日

大鍋の湯気立ち競ふ屋台店

康子

初電車いまし傾く伊予の海

澄子

堰に落つ水の奏でる早春賦

せいじ

寒の入圧力釜が笛を吹く

千鶴

着膨れて判断力を疑ひぬ

うつぎ

落暉いまうち広がりし枯木立

むべ

寄せ花の要に凜と水仙花

あひる

初鏡少し笑うて見たりけり

たか子

二〇二六年一月五日

亡き夫のセーターを着て赤き杖

よし女

晴着の子帰路はおんぶや初詣

こすもす

音立てて霽に変はる夜半の雨

むべ

行員の辞儀九十度初仕事

せいじ

二〇二六年一月四日

吾娘に受け継がれ我が家の節料理

あひる

毎日句会みのる選・二〇二六年一月一二日